

## 受賞者の横顔

矢野 恒さん  
(洋舞)

## バレエ一筋の人生

自分を苦しめ抜くことが成長に



空間の美を一生追求していきたいーと矢野さん

の幼稚園を歩き回り、双葉幼稚園を借りた。この努力に父親も約束のスタジオを緑ヶ岡にプレゼントしてくれた。

「とにかく努力家。一度思い込んだら徹底してやる」と姉の渡辺登茂さんはいう。「日本舞踊のよう

がる」と厳しい。

茂さんはいう。「日本舞踊のよう

がる」と厳しい。

「日本舞踊のもうと内面的なも

の幼少期を歩き回り、双葉幼稚園を借りた。この努力に父親も約束

の名取制度がないだけに、そこに

ベレエ一筋に生きてはきたが、

ベレエの難しさもある。実力なし

でこの世界では生きていけない

舞踊)の練習後にアキレス腱を切

分を苦しめ抜くことが成長につな

がら一時はバレエ断念も考えたと

札幌に生まれ、六歳の時に札幌

四千歳。

時、鉄道へ来、矢野バレエ研究所

を持つ。その後生徒も増え、四

十年には全国コンクール上位入賞

の生徒も出、現在三つのスタジオ

を持ち、年に一回定期公演会、発

表会を開いて鉄道の風土に根ざし

た創作バレエに取り組んでいる。

バレエとともに歩んできた三十

四年間といつても決していい過ぎ

ではない。バレエを愛し、情熱を

ひたすら燃やし続けている。幼い

ころからだが弱く、家の中で一人

で遊ぶ、内気な少女がバレエを習

い始めたのは六歳の時。札幌市で

千田和子舞踊団に入団したのがき

っかけだった。

父親が太平洋炭礦の職員だった

ことでもあって中学生の時、釧路で

一年四ヶ月を過ごし、また札幌へ

戻り、そして東京と転々。しかし

父親が北見に転勤となり、東京に一人で留ることもかなはず、しかし、父親からは「スタジオを作つてやる」のことをもらい東京を離れた。北見でのバレエもで

きない一日、一日がつらく家出す

るよう、「太陽の少ない」釧路へ。

「兄の家に身を寄せながらとにかく古い古場をさがして釧路市内を歩いていたんです」というように市内

バレエとともに歩んできた三十

四年間といつても決していい過ぎ

ではない。バレエを愛し、情熱を

ひたすら燃やし続けている。幼い

ころからだが弱く、家の中で一人

で遊ぶ、内気な少女がバレエを習

い始めたのは六歳の時。札幌市で

千田和子舞踊団に入団したのがき

っかけだった。

## 「御上吉芸術賞」に輝く

&lt;3&gt;

いう。しかし「私にはバレエしかない」と苦しみの中から一層固く決意した。

「日本舞踊が地上の美なら、バレエは空間の美。空間の自由な発想の中で一生跳んでいたい」といい

市で洋舞団を組織していた千田和先生の所へ入団。その後、石川みな子先生の門下生となり、青葉と同時に石川先生のもとで内弟子修業。一年後、東京の石井不仁香スタジオでレッスンに励み、東京青年バレエグループに入会して活躍。昭和三十三年、二十三歳の

情熱をバレエに燃やす。高校卒業と同時に石川先生のもとで内弟子修業。一年後、東京の石井不仁香スタジオでレッスンに励み、東京青年バレエグループに入会して活躍。昭和三十三年、二十三歳の

情熱をバレエに燃やす。高校卒業と同時に石川先生のもとで内弟子修業。一年後、東京の石井不仁香スタジオでレッスンに励み、東京青年バレエグループに入会して活躍。昭和三十三年、二十三歳の